

学生の知識創造における大学図書館の役割

安井 愛

近年、高等教育機関において自ら考え、行動できる人材を育成することが求められている。多くの大学では、アクティブラーニングという学生の能動的な学習を促すようなカリキュラムが導入されつつある。大学図書館では、アクティブラーニングを支援する場として、ラーニングコモンズを設置し、そのニーズに応えようとする動きがある。アクティブラーニングは、知識創造にも大きな役割を果たしており、知識創造型図書館を謳っている大学図書館がその役割を担うのに最適であると考えられる。知識を創造するということは、学習者が情報・知識獲得し、知識構造に変化が起ることによって、新たな知識が生まれていく過程をいう。石井の知識情報空間の諸側面モデルでは、学生の知識や大学図書館などの知識、情報空間を取り巻くモデルを展開している。先行研究では、知識創造における先行研究やラーニングコモンズの実態調査などは多く見られたものの、ラーニングコモンズを知識創造の観点から見たものは見当たらなかった。そこで本研究では、知識獲得・創造の過程に焦点を当て、大学図書館およびLCは学生の知識獲得・創造にどのような役割を果たしているのかを文献及びWWW調査を行うことで明らかにする。

ラーニングコモンズについては、実態調査として、東京大学の駒場アクティブラーニングスタジオ、はこだて未来大学のプレゼンテーション・ベイ、スタジオ、千葉大学のアカデミック・リンク・センターを取り上げ、学生の知識創造に関わる取組みをそれぞれ調査した。ラーニングコモンズの構成要素、インフォメーションコモンズやそれらの機関の環境におけるレファレンスサービスの現在と将来の動向についての意見を知るため、アメリカの大学図書館員を対象に2008年ごろ行ったアンケート調査を集計し、分析したものなどの先行研究も調査した。これらの研究では各々の取組みについては記載があるが、ラーニングコモンズの共通の定義やその評価などにはあまり触れられていない。そのなかで、石井の知識情報空間の諸側面モデルがもっとも本研究で展開していく議論に近いと判断した。このモデルの中心部分を抜き出し、その中の人々が持っている知識と形式化されている知識の両方の側面を持つ部分としてラーニングコモンズを加えるこのモデルを軸にし、さらにラーニングコモンズの要素を加えて展開した。

今後のラーニングコモンズの課題として、学生のニーズに応え、その創造力を刺激する学習空間となることが求められる。はこだて未来大学の例のように、アンケートによるポジティブな評価は見られたが、それを他の大学でも同様に評価可能な一定の基準ができることが望ましい。今回の研究でラーニングコモンズが学生の知識の創造にどのように役に立ち、さらにラーニングコモンズを超えたラーニングコモンズを課題としたい。

(指導教員 逸村裕)